よると、ドームの直径8mをこえる大型プラネタリウムの数は、アメリカについで世界第2位。15m以上だと、なんと世界一だそうです。

現在、プラネタリウムは単に学習の場としてだけでなく、大人のリラクゼーションの場やデートスポットとしても広く受け入れられています。プラネタリウムが、デートや癒しの時間の中で、宇宙に関する知識に触れることのできる場ともなっているのです。

地球に触ってみよう

1923年、世界で初めて、ドイツでプラネタリウムのデモンストレーションが行われました。プラネタリウムの星空は、あくまでも地面から見た星空であり、視点は地球から外に向けられています。近年、人類はその営みによって、地球上にさまざまな環境問題を引き起こしています。そろそろ私たちは、プラネタリウムで体験するような地球から宇宙を眺める視点だけではなく、宇宙から地球を見つめるという、未来派的な視点を養う時期に来ているのではないでしょうか。

昨年末、生命の海科学館に「触れる地球」の4号機が導入されました。わが国で触れる地球の1号機が完成したのは、今から3年前のことです。これは、アメリカ航空宇宙局（NASA）などの人工衛星が観測した地球の姿が再現された、本物の地球のおよそ1千万分の1、直径1メートル、ちょうど大人がひと抱えできる位の大きさの、光り輝く地球儀です。

▲思わず手をのばして触りたくなる「触れる地球」

半球は夜、反対側の半球は日中となっていて、刻々と雲が流れ、時間が経つにつれて昼と夜が入れ替わっていきます。軸で固定された地球儀とは違い、どの方向にも回転させることができるので、思うままに回して眺めることができます。

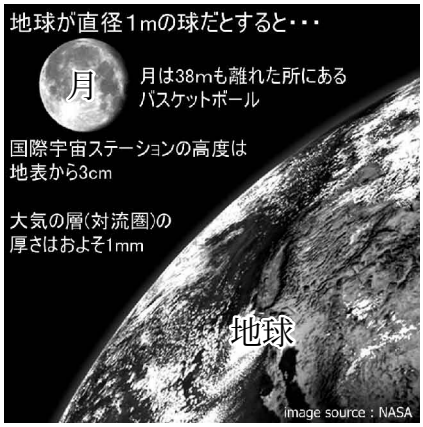
触れる地球は、現在ではまだ限られた人間しか見たことのない、宇宙から眺めた地球の姿を再現することができる装置なのです。

「触れる地球」でいやしタイム

この「触れる地球」で見ると、大気の層（対流圏）はほんの1ミリメートル足らずの厚さしかありません。ヒマラヤ山脈もマリアナ海溝も、1ミリメートルに満たない微かな凸凹に過ぎず、海の大部分は地球表面に張り付いた薄っぺらな水の膜に過ぎないことがわかります。

さらにこの地球には、渡り鳥の軌跡や鯨の回遊ルート、気候分布やその変化などを重ねて映したり、衛星やスペースシャトルなどから撮影された地上のさまざまな姿を、拡大して映し出すこともできます。

▲スペースシャトルから見たオーロラのすがた



◀地球を直径1メートルの球だとすると…

難しい話は、ひとまずおいて、生命の海科学館の触れる地球で、暗い宇宙に浮かぶ地球を眺めることを楽しんでみるのはいかがでしょうか。子どもさんばかりではなく大人の方も、ちょっと日常を離れてぼんやりしたいときや、恋人たちの新しいデートコースのひとつに、宇宙に青く輝く地球を眺めるなんて、なかなか未来派的な大人のリラクゼーション・タイムだと思いませんか。

触れる地球は、この春から本格的な運営がスタートする予定です。みなさん、どうぞお楽しみに！

生命の海科学館
学芸員　山中　敦子